ほ近く、約三四千米突の邊に横はるに反し、東北の山嶺遠く北方に赴き、遂に其影を沒するに至り。永昌に及んで再び現出し、是に南北の山相接近す。此の兩地間は、即ち涼州の大平原とす。永昌東樂間は、開濶なる大波狀地にて東樂以西は、南北の山互に遠く隔り、全く沙漠の前提たる光景を呈せしも、肅州に於て近接し、次で又離隔、次で又嘉峪關にて投合す。

地質は依然黃土なるも、間〻下層に赤土を露出し、殊に蘭州紅城堡間は、全山殆んど赤土にして、多量の鹽分を含有する爲め、崩壞絕壁を成す處少なからず。又赤土中多く石膏を含む。涼州附近は赤綠の礫石を交へ、東樂以西は細砂と爲る。岩層も綠泥片岩大部を占め、蘭州の西方には往々花崗岩、泥灰石を、定羌の南山には石炭を露出し、他は礫石を混じたり。

鹹分は、到る處含有せざるは無く、只其の量に多小の差あるのみにして、蘭州、紅城堡間は最も多く、爲めに井水、河水共飲用すべからず。

又金羌河畔には、硝石の分量著しく、現に製造所四個を有し、土人は之を以て爆竹を製せり。